

中国貴州省少数民族地域における インバウンド観光の考察 —黔東南苗族侗族自治州を中心に—

鈴木 晶

A Study on the Inbound Sightseeing at the “Miao” and “Dong” Ethnic Minority:
The Autonomous State of Guizhou Province in China

Shou SUZUKI

【要 旨】

貴州省黔東南苗族侗族自治州は、中国全土の中でも少数民族の人口が最も多い自治州の一つであり、住民の暮らしは決して裕福な状況に置かれていない。そこで中国政府は、少数民族の住民生活を向上させるため、少数民族観光による地域経済の発展を目指して観光戦略を構築し、1984年から少数民族観光の振興に着手した。自治州政府側が民族観光による町興しを行いながら、外貨を獲得するためにインバウンド観光にも力を入れたのである。本論文では、少数民族地域で展開されている観光振興におけるインバウンド観光の実態を考察した。

【キーワード】

少数民族、少数民族観光、観光開発、インバウンド観光

【Abstract】

The autonomous state for ethnic minorities called “miao” and “dong” in Guizhou Province is one of the autonomous states where these minority groups are most populous. The economic standard of these minorities is not high enough according to the Chinese criterion. The Chinese government mapped out a plan of the economic development through tourism in this ethnic area and has made efforts to increase sightseeing tours in the area since 1984. At the same time the local government set up various projects to economically develop the area through sightseeing and promoted inbound tourism to obtain foreign currency. In this paper the author examined the actual situation of this tourism in the area.

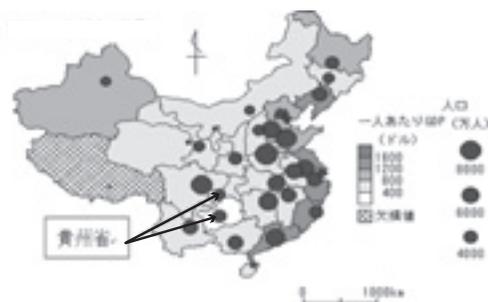
【Key Words】

ethnic minority, sightseeing in the area inhabited with ethnic minorities, promotion of tourism, inbound tourism

はじめに

中国は国土が広く、人口も多い国で漢民族を含めて56の少数民族を抱える世界でも極めて希な多民族国家である。対外開放路線によって、確かに上海や広東など沿海地域に位置する都市においては経済発展が顕著となったが、他方で内陸部の農村や少数民族が暮らす辺境地域の経済発展は遅れ、農民や少数民族の生活は現在でも貧困との闘いを強いられている。そのため、中国政府は少数民族の生活を向上させるための手段として、観光開発による産業振興が最も効果的な施策であると判断し、その施策を現在推し進めている最中である。

図表1 貴州省の位置



中国西南部少数民族の集中地である貴州省でも、民族観光による地域経済の振興戦略が練られ、各種の観光振興策が進められている。しかし、これまでに同地域での民族観光資源の開発に関する研究は多くあるものの、国内及び海外からの観光客の動向や、今後の観光振興対策についての研究はまだ少ないのが実情である。本論文は、地元政府が毎年実施し、公表している統計数字に基づいて、貴州省黔東南黔東南苗侗族自治州のインバウンド観光の状況を分析しながら、少数民族観光の問題点を指摘し、その打開策を提示したものである。

その上で、貴州省観光産業発展「十五」企画の中で、貴州省の観光産業の発展は「西部を改善、東部を開発」とする観光開発方針を定め、同自治州において貴州省が観光開発の重点地域

に指定された。これにより自治州の州委（自治州共産党委員会）、州政府は次第に観光産業の発展に目を向け始め、1985年からは自治州政府内の指導層に観光分野を専門とする責任者を任命し、観光分野を管理する部門を設置した。現在までの20数年間で、観光市場の開発と観光宣伝と並行した観光客の誘致運動によって民族文化及び自然生態観光の観光形態が整ってきている。

1. 自治州内の観光資源

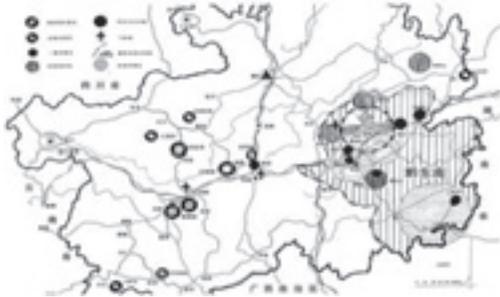
貴州省黔東南苗族・侗族自治州内には、観光資源が豊富に存在する。苗族と侗族を代表とする民族文化は、同自治州で最も大切で最も観光客を引き寄せる資源である。カルスト地貌、森林植生と山水景色は美しく魅力があり、歴史の長い文化面の観光資源も豊富である。民族文化と歴史文化が自然景観と生態環境とよく調和することが黔東南苗族・侗族自治州の観光資源の最大な特徴である。また、世界郷土文化基金の「大自然の懐に復帰する観光地ベスト18」の一つに指定された名高い観光地（アジアには二つあり、もう一つは中国のチベット）であり、「くたくたに疲れた人類の最後の古里」として褒め称えられている。

現在、国の指定として黔東南苗族・侗族自治州内には、一つの国家級風景名勝区（舞陽河）、1つの国家級森林公園（雷公山）、1つの国家歴史と文化の名城（鎮遠）、2つの生態博物館（ノルウエーとの共同出資で黎平の平堂と錦屏の隆里に設けられた）、4つの国家級重点文化財、5つの中国現代民間絵画郷（文化部指名）、10の省級風景名勝区、1つの省級森林公園、5つの省級自然保護区と32の省級重点文化財がある。

このうち、従江増沖の「鼓楼」、黎平地坪の「風雨橋」、高屯の「天成橋」（黎平空港付近にある天然アーチ橋。高度も長さも世界のトップクラス）などは、ギネス・ブックにも収められたものであり、台江の苗族の「姉妹祭」、侗族の「大歌」、肇興の侗族集落、雷山県西江の「千

戸苗族集落」と錦屏隆里の生態博物館などもある。

図表2 貴州省内における黔东南苗族侗族自治州の位置



(1) 貴重な自然観光資源

自治州内には国家風景名勝区1か所、省級風景名勝区2か所、省級自然保護区1か所、省級風景名勝区を申請中の2か所（剣河と下司）がある。以下は、各自然観光資源の概要である。

①国家級舞陽河風景名勝区

この風景名勝区の総面積は625平方キロメートルである。名勝区は舞陽河を中軸線にし、三つ古鎮（県より小さい行政単位）を貫いている。この三鎮は国家級歴史文化名城の鎮遠県舞陽鎮－施秉県城関鎮－黄平県旧州鎮である。この空間には有名な峡谷が8か所ある。上舞陽の頭峡、無路峡、老洞峡、観音峡、下舞陽の諸葛峡、龍王峡、西峡、東峡で、このほか10の景勝区（鎮遠歴史文化名城、鉄溪峡谷風光水流探検、上舞陽河峡谷、下舞陽河峡谷、雲台山、黒沖奇山雲海、杉木河峡谷、旧州歴史文化古鎮、飛雲崖、重安江峡谷）から成り立っている。

②省級龍鑿河風景名勝区

この区域の面積は364平方キロメートルであり、五つの観光風景区（思州古城、龍鑿河風光、鑿山景区、馬家寨景区、龍田景区）のほか、独立の観光スポットである大有中木召古庄園遺跡、平庄万佛長廊の鍾乳洞によって組み合わせられている。

③省級八舟河風景名勝区

八舟河景区は世界一の天生橋景観、多様性東風生物保護区域、高屯風景区と南泉山景区に

よって構成される。また河川や溪谷、ダム、カスト地表の森林が田園風景と組み合わせられている。区域の面積は426平方キロメートルである。

④省級雷公山自然保護区

雷公山保護区の総面積は473平方キロメートルである。保護区の中心地域に国家一級保護植物の秃杉があり、そのほか二級と三級の保護植物がある。例えばユリノキなど10種類があり、アカゲザル、オオサンショウウオなど国の貴重保護動物が生息している。以上の三つの風景区と一つの自然保護区の総面積は1,888平方キロメートルである。

図表3 黔东南苗族・侗族自治州における観光資源の分類表

自然観光資源	歴史文化観光資源
杉木河漂流	鎮遠古城と青龍洞
野洞河漂流	飛雲崖
舞陽河水上観光	重安江の三朝橋
八舟河風景名勝区	馬家寨と陳園園の墓
黎平の天然の橋－天生橋	徳鳳古鎮
龍鑿河	黎平会議開催地旧跡
雲台山	龍大道烈士故居
苗嶺主峰、雷公山	中木召古城跡地
飛雲大峡谷	錦屏の飛山廟
鉄溪	
剣河温泉	

(2) 人文観光資源

黔东南州自治政府の文化財の管理及び研究機関の調査によると、現在までに域内にある文化財は3,800か所あるという。このうち、国家級重点文物保護単位は2か所、省級文物保護単位は32か所、県（市）級文物保護単位は402か所である。

同自治州内では近年、黔东南州民族博物館のほか黄平県飛雲崖民族祭り博物館、鎮遠県青龍洞民族建造物博物館、台江県文昌宮民族刺繡博物館、雷山県郎徳上寨民族村展示室、黎平県「黎平会議」会議跡展示室、鎮遠県平和村反戦同盟文物展示室が開設された。これらの館内に収蔵されている各種類の文化財の点数は1万点

以上にも達している。

2. 観光開発の現状

(1) 自治州観光産業の変遷

貴州省黔东南苗族侗族自治州の観光産業の振興は1980年代中葉から始まった。1984年には、同自治州に来た海外からの観光客数はなんと年間で71人であった。この状況を憂慮した中国国家観光局と省の観光局などの政府関係部門は、同自治州での観光開発が可能かどうか判断するため、数回にわたって中央政府の責任者が同自治州を視察。その結果、同自治州での民族観光には相当な潜在力を持っている、という結論を発表した。

その上で、貴州省観光産業発展「十五」企画を策定し、貴州省の観光産業の発展は「西部を改善、東部を開発」するとの観光開発方針を定めて、同自治州において貴州省が観光開発の重点地域を指定した。これにより自治州の州委（自治州共産党委員会）、州政府は次第に観光産業の発展に目を向け始め、1985年からは自治州政府内の指導層に観光分野を専門とする責任者を任命し、観光分野を管理する部門を設置した。現在までの20数年間で、観光市場の開発と観光宣伝と並行した観光客の誘致運動によって民族文化及び自然生態観光の観光形態が整ってきている。

同自治州が各地域の観光資源の特色を生かして、様々な観光コースを計画し国内や海外に観光情報を発信しているが、その各コースについては下記のとおりである。

(1) 黔东南苗族侗族自治州における観光コース

国家級風景名勝区舞陽河を中心とする生態観光及び歴史文化観光（北方面コース）

- ①舞陽河風景区、陳園園墓、鬼神文化劇、修学旅行区
- ②鎮遠歴史文化名城、下舞陽、鉄溪景勝区バカンス区
- ③黄平野洞河、飛雲崖、麻塘革家風情村の体験観光区
- ④施秉上舞陽、杉木河、雲台山観光、参加体

験観光区

(2) 苗族文化及び自然生態観光(北方面コース)

- ①剣河温泉、苗族刺繡、百キロ照葉林観光区
- ②台江姉妹祭り、反排苗族木鼓舞、古代生物化石博物館での体験型観光区
- ③雷山西江苗寨、郎徳博物館、雷公山バカンス区
- ④凱里、南花、季刀、麻塘体験観光区
- ⑤麻江下司少数民族水上体育センター、「農家楽」、農民画見学、バカンス区
- ⑥丹寨雅灰百鳥服の盛装、八寨苗、排調河観光修学区

(3) 侗族文化及び自然生態観光(南方面コース)

- ①黎平肇興、堂安、地坪、八舟河文化体験観光区
- ②榕江車江世界一高い鼓楼、古榕木林観光区
- ③錦屏北部侗族、隆里生態博物館と清水江風景観光区。
- ④天柱三門塘建築、北部侗族大歌会に修学旅行区

(4) 三板溪観光（中部コース）

- ①上部地域の水療法苗族文化観光区
- ②中部地域の観光健康娯楽森林休養体験園
- ③下部地域のダム観光、侗族文化生態園

3. アジア・欧米各国の海外観光動向

次に、日本をはじめとする東南アジア諸国や欧米、中国系海外観光客について、それぞれの観光動向を調べてみた。

(1) 香港・マカオ・台湾地域

台湾の人口は約2,300万人（2009年現在）で、このうち台湾人が毎年、海外へ旅行する人数は5分の1ほどを占めている。台湾人が海外旅行する客源は主に台北住民であり、主な旅行先は東南アジアと太平洋周辺地域に集中しているが、観光客の約42%は旅行を楽しむ行き先を中国大陆と香港、マカオ方面に決めているのが特徴。

一方、香港・マカオの人口は750万人で、この両地域の住民は自由に消費できる収入が多く

旅行に興味を持ち、大都市を離れて大自然に触れる旅行にはとりわけ興味を持っている。その上、彼らはビジネス意識が高く、中国大陸との取引にも強い関心を抱いている。つまり香港・マカオ客は大陸とのビジネス活動と同時に、中国内陸部の自然や少数民族文化が集中する西南少数民族地域を訪れる人も多い。また、中国内陸部に向かう交通手段が多様化しているのと、中国国内への入国手続きが簡便になったことが多くのインバウンド観光客をもたらしている。貴州省黔东南自治州に最近できた観光スポットには香港・マカオからの観光客を大量に引き寄せているとの新しい動きもある。

①台湾客による大陸訪問の観光市場分析

この20年間、台湾客の海外観光は高成長期から低成長期に転換する時期に入っている。最近の傾向では、中国大陸を訪問する観光客数は増加基調ではなく、年によって増えたり減ったりと観光客数が増減しているのが見て取れる。例えば、1991年の湾岸戦争の影響で、中国大陸を観光する台湾客数はゼロ成長になった時もあった。1994年には浙江省の千島湖事件で台湾客の大陸訪問が一時的に大きな打撃を受けた。台湾での独立運動の影響から大陸と台湾との政治対立及び軍事面での緊張状態が台湾出身の観光客にとって、中国国内の観光先を選択することを一層難しくしている。

②台湾人客の海外旅行の特徴

現在の台湾人にみる海外観光の特徴として「さらに短く」、「さらに小さく」、「さらに低く」、「さらに少なく」というキーワードが挙げられる。というのは、観光地での滞在時間がさらに短くなり、観光先の選択距離半径がさらに小さくなり短期休暇、個人旅行が中心となっている。このうち、ビジネスを目的とした台湾客数は総客数の半分を占めている。残り半分は観光と親族訪問である。

台湾人の観光目的先は主にアジア太平洋周辺の近距離である。現在では中国大陸を訪れる台湾からの観光客の80%は個人観光客であるが、台湾客の海外への旅行形態は団体ツアーと個人と割合が各半数となっている。そのため、台湾

客の団体ツアーによる中国大陸訪問の潜在市場は大きい。台湾人の海外観光の年齢層は中年と若年層で大半を占めている。また、男性の場合はビジネスを目的とした海外出張が多く青少年や独身女性、職業を持つ女性、家庭の主婦層の海外観光は76%以上を占めている。このことから、今後の台湾観光客層の対象が中年と青年及び女性に集中することが明白である。

③大陸と台湾住民の相互訪問

現在、中台間において観光産業に参入する業者がますます増加している。その多くの旅行会社が香港航空とマカオ航空を利用するケースが顕著で、中台間の増便で競争をしている。一方、中国大陸の各大都市からの香港とマカオへの直行便数も増えつつあるが、この線路便の利用率はかなり低く、深刻な問題となっている。

(2) 香港人観光客の観光行動

一方、香港は東西文化が交差する地域であり、観光客にとっては買い物天国とのイメージがある。香港では高級な物質的及び精神的な享受が受けられる都市である。近年、広東及び珠江デルタ地域との間で経済及び観光面での関係が強くなり、中国内陸部の雄大で美しい大自然風景や人文資源、あるいは異質に感じる民俗文化そのものに対して、香港から訪れる観光客にとっては魅力的なものとなっている。こうした観光要素は、中国のこれまでの固有の歴史的名所・旧跡と大都市に集中する観光資源に対して補助的な役割を果たしていると考えられている。

(3) 日本人の観光動向

日本の人口は約1億2,700万人で、アジア各地へ観光客を送り出す送客国である。2000年には、日本人の海外旅行者数は1,700万人に達している。世界観光組織(WTO)の予測によると、2020年には1億415万人に達すると予想している。

(4) 韓国人の観光動向

韓国も中国にとって、観光客を送り出す貴重

な客源である。韓国人客は中国文化に強い興味を持っていることから、中国にとってはインバウンド観光の送客国として重要な国として位置付けている。

(5) 東南アジア5カ国の観光動向

東南アジア5カ国（シンガポール、マレーシア、インドネシア、タイ、フィリピン）は、世界の中で最も経済発展の著しい地域の一つである。この5カ国の政府は国の経済発展のために、ASEANの一員として互いに協力することに全力を挙げ、すでに独自の自由貿易圏を形成している。従って、現在この5カ国の国民で海外に旅行する観光客は多くなり、中国大陸を訪問する観光客数は100万人以上に及んでいることから中国にとっては、重要な観光客を送り出す「客源国」ともなっている。

東南アジア5カ国による自由貿易圏の確立によって、5カ国の国民にとってはこの地域での相互による海外旅行が一層便利になっているが、中国政府による5カ国の相互訪問によって中国と東南アジア各国の関係はさらに改善されていることから、経済面での交流も増えることによって各国から中国大陸への観光が拡大することが予想されている。また、東南アジア5カ国には在住中国人が数多くおり、昔から親族・親友訪問という慣習がある。地理的關係、血縁關係、文化伝統などの理由で近隣の国及び中国を観光地として選ぶ人が多いのが特徴である。中でも近年は、旅行経験の豊富な人々の中には新奇さや探検性のある観光目的地を選ぶ傾向がみられ、例えば南米やアフリカ大陸、トルコ、エジプトといったディスティネーションへの観光客が増えている。

こうした観光客には、中国大陸でも少数民族地域の観光に対しては関心が大きいことがうかがわれる。と言うのは、素朴な民族風習が残る中国大陸南部地方、特に5カ国が隣接する広西、雲南などで暮らす住民は、東南アジア民族と共通する慣習を持っている（例えば、雲南タイ族はタイ国の中の一つの民族と同一祖先の民族であり、また雲南は中国の独自の山水風景と

民族慣習を持っている）ことが指摘できる。

このため、現在では5カ国の旅行会社において、中国の少数民族観光市場に目を向け始め、その方面での観光商品を多様化させ、中国市場専門の担当者を多く配置しているのが実情である。

(6) 米国人観光客の観光行動

近年、米中両国の高級指導者の相互訪問によって、両国の関係は改善され米国から中国への観光客数が増えつつある。米中航空路線のフライト数も増え、飛行時間が短縮されたことから運送コストがさらに削減されている。基軸通貨であるアメリカドルは中国国内においても広く流通し、アメリカからの旅行者にとっては利便性が高く、ビザ申請の手続きも簡素化されていることから、中国にとって拡大が期待できる重要な客源市場と言える。最近の特徴としては、観光客の中で個人客が大きく増加しているほか、米国ビジネスで中国に投資する意欲が強いことから、観光を兼ねたビジネス来客が多くなっている。

個人観光客層の観光目的で、近年人気となっているのが「探検観光」で、対象年齢層は25歳から75歳までと幅広く、独身女性だけでなく家庭の主婦層や、中高所得のある高齢者で構成されている。グリーン・ツーリズムは新しい観光として注目され年々旅行者数が増加傾向にあり、南米コスタリカでは雨林動植物に関心のある米国人観光客にとって、グリーン・ツーリズムの目的地の一つとなっているが、この探検観光と兼ねた観光形態がアメリカ国内で人気となりつつあるのが特徴だ。

貴州省黔東南苗族侗族自治州を来訪する米国人観光客の年齢層は55～65歳が中心で、さらに高学歴の人が多く刺激的な体験ができる観光商品に強い関心を持っている。米国文化とは違う異国の雰囲気をも十分に味わい、自身の知識や生活経験を増やしたいと考えている人が多いのも特徴で、中国には長い歴史と伝統文化があり、さらに米国人客を魅了する観光資源の一つとして少数民族観光による探検観光としての資源が

あることから、十分に米国人観光客の欲求を満たすことが可能である。

ただ、従来から米国人観光客にとって人気となっている観光コースは北京、上海、西安、桂林であり、最近では最も体験したい観光先として三峡下りとシルクロードのコースがある。このディスティネーションはアメリカ人の冒険心が強いことを示しているもので、中国にとっては新疆ウイグル地区のロプフ砂漠への探検ツアー、長江、黄河上の漂流探検ツアー、神秘的チベット高原の河川、チベット北部の無人地域と黔東南自治州などの探検ツアーを開発すれば、米国人観光客の新しい観光地と成り得ると考えられる。特に、米国人観光客の海外での平均滞在時間が延びる傾向にあることで、時間の掛る中国内陸部に位置する貴州省への旅行にも障害が減少するため、貴州省自治州にとって米国人観光客は、重要なインバウンド市場となることから今後、米国人観光客の需要拡大に向けた施策展開を注視する必要がある。

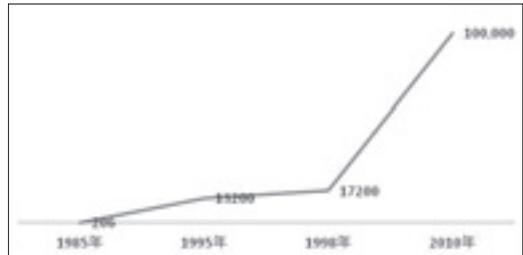
(7) 欧州観光客の観光動向

欧州各国の旅行者は、個人旅行市場で拡大しつつあるのが特徴である。今後、中国経済の発展が進展することによって、さらにビジネス活動や諸会議の開催などの面で観光需要が増すものとみられる。欧州客の海外旅行としての目的地は、まず地中海を巡る周辺を選択し、次にスペインやフランス、イタリアなどを観光目的地にしている。しかし、近年では日本や中国をはじめとするアジア太平洋地域を選ぶ観光客が増加基調にある。

欧州人の観光は太陽とビーチが中心で、夏のバカンスシーズンに見られるように海岸リゾートで休養・保養することを目的としている。しかし、今後は娯楽性や興味性、参加性のある観光商品に人気が出てくるものと予想され、車などに頼らずに自分の足で歩く健康保養旅行などがますます歓迎されると思われる。欧州人にとって、東南アジア諸国の観光商品に比べると、中国の民族文化と社会風物及び歴史的観光資源は魅力的に映っていることから歴史旧跡や

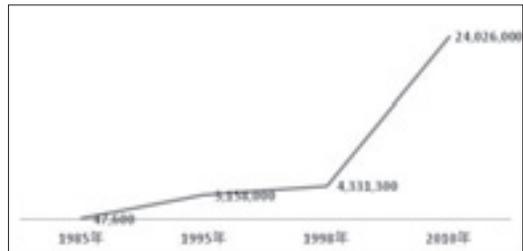
文化遺跡、あるいは多様な自然風景は観光目的の主要な要素となり、その意味では万里長城、長江三峡、シルクロード、チベット、黔東南自治州は多くの欧米観光客を魅了することが期待できる。

図表4 海外観光客数の推移 (単位: 人)



出所: 貴州省黔東南苗族侗族自治州公表の統計をもとに著者作成

図表5 観光収入の推移 (単位: ドル)



出所: 貴州省黔東南苗族侗族自治州公表の統計をもとに著者作成

4. インバウンド観光の展開

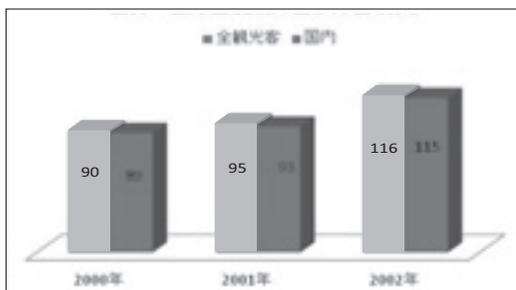
同自治州が本格的に観光振興に乗り出してから、来客観光客数は大幅に伸びている。1985年のスタート時点では、海外観光客数は206人で観光収入は4万7,600ドルしかなかったが、10年後の1995年になると海外観光客数は1万3,200人、観光収入は315万8,000ドルに増加した。さらに1998年の海外観光客数は1万7,200人、観光収入は433万1,300ドルに増加した。スタート時の1985年に比べ1998年には海外観光客数が83.49倍、観光収入も約100倍近くまで増えている。21世紀に入ると、中国少数民族観光は海外観光客をさらに魅了させ続け、直近の2010年には海外観光客数は10万人に達し、外貨収入

も2,402万6,000ドルまでに増加した。1998年当時に比べ観光客数は10倍、観光収入は6倍までに膨れ上がっている(図表4.5)。

(1) 国内観光客数と海外観光客数の推移

2000年以降、同自治州では観光スポットの開発や観光産業の振興が着実に進んでいることから入込観光客も増加基調を辿っている。図表6が示すように、2000年に同自治州を訪れた全観光客数は90万8000人に上り、このうち中国国内からの観光客が88万6,000人で、海外からの観光客数は1万4,800人となる。観光総収入は1億7,040万人民元で、このうち外貨収入は約500万ドルとなっている。

図表6 国内観光客数の推移(単位:万人)



出所: 貴州省黔东南苗族侗族自治州公表の統計をもとに著者作成

その後、2001年には全観光客数が94万9,800人になり、このうち中国国内からの観光客数が93万4,000人、海外からの観光客数は1万5,800人で、前年に比べると国内観光客は4万8,000人、海外観光客数は1,000人増加した。また観光総収入は1億8,240万人民元となり、このうち外貨収入は547万ドルで、それぞれ前年より9.4%と7.0%増加している。

2002年になると全観光客数は116万3,200人となり、このうち国内からの観光客数は114万5,000人、海外からの観光客数は1万8,200人となった。前年に比べると国内観光客数は18.4%増加したものの、海外観光客数は13.2%減少したが、観光総収入は2億2,190万人民元に上っている。なお、2000年から同自治州への観光マーケティングの拡大策として、政府側から

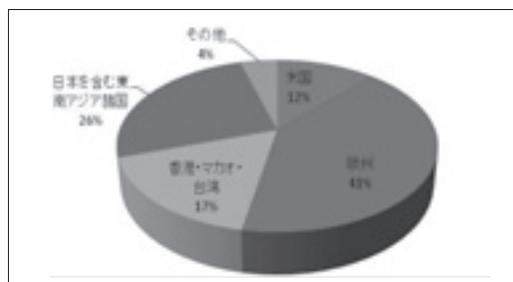
1,600万元が投資され、その後も2001年に7,300万元、2002年には1億5,000万元の資金が供給された。投資額はわずか3年で約10倍に膨れ上がり、それだけ同自治州への観光振興による住民生活の向上が重要な施策となっていたことを裏付けている。

直近2010年の統計によると、国内からの観光客は1,500万人、海外観光客は10万人に達し、前年の2009年に比べ国内観光客数は7.9%、海外観光客数は14.68%増えている。また、国内観光客からの観光収入は110億元に達し、インバウンド観光収入は2,402万6,000ドルとなり、これも前年比10%、15.6%とそれぞれ増加した。

(2) 国・地域別の滞在日数

貴州省黔东南自治州が公表している各種統計資料から、同自治州を訪れた海外からの観光客を主な国・地域別に分けて独自に分析してみたのが図表7で、1998年時点で米国からの観光客数は2,052人で、その年の全海外観光客の約12%を占め、欧州からの観光客は7,055人、同約41%だった。また、日本と東南アジア諸国からは合計4,403人で同約26%、香港・マカオ・台湾からの観光客数は2,916人、同約17%で、その他774人、同約4%となっている。

図表7 1998年時点の国・地域別観光客割合



出所: 貴州省黔东南苗族侗族自治州公表の統計をもとに著者作成

(3) 滞在時間と一日当たり消費金額

同様に、1998年に同自治州を訪れた合計1万7,200人のうち、米国をはじめ欧州、日本を含む東南アジア諸国、欧州各国からの観光客が滞

在した時間と消費した金額を独自集計したものが図表7で、それによると、米国人客の滞在日数は平均1.78日で、一人1日当たりの消費金額は142.26ドルだった。また、欧州からの観光客の滞在日数は1.78日で、消費金額は154.14ドル。日本を含む東南アジア諸国からの観光客は、滞在日数が1.77日で消費金額は152.52ドル、香港・マカオ・台湾客の滞在日数も1.77日で、消費金額は152.52ドルとなっている。

こうしてみると、同自治州から距離が遠い欧米観光客と近い東南アジア諸国との滞在日数に大きな差はなく、一人当たり消費金額も大差がない事が分かった。

図表8 1998年時点の国・地域別観光客の滞在日数と消費金額

	米国	欧州	日本を含む東南アジア諸国	香港・マカオ・台湾
滞在時間(日)	1.78	1.78	1.77	1.77
一人当たり消費額(ドル)	142.26	154.14	152.52	152.65

出所：貴州省黔南苗族侗族自治州公表の統計をもとに著者作成

5. 国内観光の変化

一方、少数民族観光の振興で観光開発がスタートして10年が過ぎた1995年から1998年までの4年間に、同自治州を訪れた圧倒的多数の中国国内からの観光客の入込客数と観光収入の推移を、同自治州から入手した資料を基に独自に分析したものが図表9である。それによると、1995年に自治州を訪れた国内観光客数は30万人で、観光収入は750万元だったが、翌年の1996年には観光客数が37万人に増加し、観光収入も925万元に増加した。さらに1997年には観光客数70万人、観光収入1,700万元に、1998年には同71万人で、観光収入は1,746万元に増加。この4年間の伸び率は観光客数、観光収入ともに約2.4倍となっている。ちなみに、直近2010年

の国内観光客数は1,500万人で観光収入は110億元に達している。これは後に記述するが、国内でブームとなった「赤い観光」(共産党の革命遺跡を巡る観光)によるもので、1998年に比べると観光客数も観光収入も桁違いな伸びを示している。なお、国内観光客を地域別で見ると、貴州省の首都貴陽及びその周辺地域から訪れる観光客が多く、隣省の懐化地区と広東省、広西省からの観光客も年々増加してきている。このため、貴州省以外の省からの観光客はすでに全体の観光客総数の15%を占める。

図表9 国内観光客数と観光収入の推移

	1995年	1996年	1997年	1998年	2010年
観光客数(万人)	30	37	70	71	1500
観光収入(万元)	925	925	1,700	1,740	110,000

出所：貴州省黔南苗族侗族自治州公表の統計をもとに著者作成

6. 今後のインバウンド観光の展開について

各地で観光開発が進む中で、同自治州はそれまでの観光施策を転換して、民族文化及び生態観光の自治州として目指し始めたのは1999年からである。その理由は、中国国内で対外開放路線を打ち出してからというもの、大規模な観光開発が行われ、生態系を破壊だけでなく森林を大規模に伐採するなど自然環境を壊す行為が多発したため、1998年には中国最大の河川である長江で大洪水災害が発生した。大自然に対する破壊行為が回りまわって人々の暮らしを脅かすことになったことから、中国政府はその年に全国の天然森林を伐採する事業を中止する命令を下した。

その結果、これまで同自治州の財政を支えてきた「両種の煙草」及び「木材」産業が全滅状態になった。この難局を打開するため同自治政府は冷静に現状を分析した上で、地域内にあるあらゆる資源を総括的に分類し、どのような産業が最適であるかを検討した結果、「民族文化と生態州を目指す」観光産業を展開することが

最善の方法と判断した。その上で、観光振興策を大衆化市場と個性化市場に分けてインバウンド観光を展開することにし、「凱里-鎮遠」を中心とする総合観光地域開発を進めることにした。

「凱里-鎮遠」を中心とする総合観光地域は清水江と舞陽河の中上流の地域に含まれる。地域の面積は広く、この地域には同自治州の観光資源が最も集中し、交通網の整備も進んでいることから国家予算が投じられ、早くから観光開発が行われた。その結果、多くの観光客が訪れたことによって、地域経済が発展し村民の収入は増加した。今後も、観光により多くの経済効果が期待できる地域で、この地域の観光資源と観光商品の特性からすると、このエリアは主に国内観光市場の目的地となるはずである。

このエリアの客源市場は、大衆化市場と個性化市場に分類される。大衆化市場とは、いわゆる一般的な観光旅行形態に位置づけられ、市場規模は大きいものの消費額は低く、現実的な市場である。個性化市場とは自然や文化、生態系などに興味を持つ旅行者をはじめ、学術的専門分野での視察や観察、会議などで訪れる個人・団体を対象とした旅行形態で、市場規模は小さいものの消費額が多いという特徴を持ち、かつ市場としては拡大力を潜在的に秘めている。

こうした客源市場を前提に今後、国内及び海外からの観光客をさらに引き寄せるためには何が必要か、国内と海外の観光客の需要に対応したそれぞれの対策を考察してみた。その結果、自治州政府と観光局は「凱里-鎮遠」周辺地域を重点展開地域として指定し、今後の展開優先順位として「重要性順位1位としての開発エリア」と「重要性順位2位としての開発エリア」に分けて観光開発を進めていくべきと思考する。

終わりに

これまで、黔东南苗族侗族自治州は「世界一の本物民族文化の観光地」を目標にして「民族観光」としての観光イメージを作ってきた。こ

れまでの長い期間の観光宣伝によって、黔东南苗族侗族自治州はすでに全国では一定の知名度が上がり西江、鎮遠、芭沙、兆興の地域は「民族文化体験観光」及び「長期休暇滞在」の観光地としてのイメージを定着しつつある。観光宿泊施設も10年前よりもだいぶ改善され、黔东南苗族侗族自治州には4万人が収容できる宿泊施設がすでに建設された。中型ホテル以上の数が198軒あり、そのうちすでに政府観光局から認定された観光ホテルは38軒に上り、収容人数は1万3,520人という規模を誇る。同自治州の政府は2016年までの5年間に、さらに10万人の収容力を持つ施設を建設し、政府認定観光ホテルの数を全体の30%にする予定でいる。

一方、2006年から中央政府と国家観光局は共産党の革命業績をテーマにした観光地造成運動である「赤い観光」を全国で展開し始めた。これに合わせて、貴州省政府及び黔东南苗族侗族自治州は80年前の共産党の初期活動地の「黎平会議」遺跡などの革命観光資源をいくつか作り出している。

この一連の国内観光客向けの観光資源の開発が一定の効果が始め、前述したとおり2010年の同自治州観光当局の統計によると、黔东南苗族侗族自治州を訪れた国内客数はすでに1,500万人に増えた。しかし、同自治州政府が最も期待しているインバウンド観光である海外観光客数は、期待するほどの伸びをしていないのが実情である。つまり、直近の2010年に貴州省に來訪した海外観光客数は約43万人にとどまり、全国の27位に甘んじている。

さらに、同自治州内を訪れた海外観光客数は10万人に達しているものの日帰り観光が多く、現地での消費額も少ないのが問題となっている。滞在日数は10年前とほとんど変わらず1.7日に留まっているのが実情だ。

黔东南苗族侗族自治州は、全国でも有数の少数民族観光地域であり、数多くの観光資源を持っているにもかかわらず、国際観光地として知られている観光スポットは少ない。以上の現状を踏まえると今後、同自治州が行うべきことは、まず海外への観光宣伝に力を入れるべきで

図表10 中国地域別の海外観光客数ランキング
(2007年)

順位	地域	海外客数 ARRIVALS
1	広東 GUANGDONG	24608666
2	上海 SHANGHAI	5200981
3	江蘇 JIANGSU	5125489
4	浙江 ZHEJIANG	5111789
5	北京 BEIJING	4354744
6	福建 FUJIAN	2687453
7	山東 SHANDONG	2496437
8	雲南 YUNNAN	2219030
9	広西 GUANGXI	2055188
10	遼寧 LIAONING	2000867
11	四川 SICHUAN	1708730
12	内蒙古 INNER MONGOLIA	1494505
13	黒龍江 HEILONGJIANG	1414187
14	湖北 HUBEI	1318179
15	陝西 SHAANXI	1231298
16	湖南 HUNAN	1205713
17	安徽 ANHUI	1064296
18	天津 TIANJIN	1032268
19	河南 HENAN	880885
20	河北 HEBEI	817599
21	重慶 CHONGQING	761676
22	海南 HAINAN	753122
23	山西 SHANXI	737888
24	江西 JIANGXI	664686
25	吉林 JILIN	543602
26	新疆 XINJIANG	438436
27	貴州 GUIZHOU	430021
28	チベット TIBET	365370
29	甘肅 GANSU	331238
30	青海 QINGHAI	50010
31	寧夏 NINGXIA	9373

あり、近隣省・大都市及び地域との連携を重視すべきである。黔东南苗族侗族自治州の独自性、民族性を強調しながら、国際視点から見た観光スポットの開発を行うべきである。

時代が変わることによって、人の考え方も変わってきている。従来の宣伝方法から脱却し、新しい宣伝方法を模索することが重要である。海外への宣伝もまず各国の事情を理解し、国・企業の連休制度、定年制度の調査をした上で、観光コースを企画すれば効果的な観光PRが可能である。外国の観光客を誘致する場合には、各国の消費習慣や消費心理を見極めながら各国に対応できる宣伝活動を行うべきである。

本論文でこれまでの問題点を抽出し、打開策を提案してきたが、今後の黔东南苗族侗族自治

州のインバウンド観光の研究にとって少しでも参考となることを期待している。

参考・引用文献

- 1) 陳晶, 2004年11月, 「観光開発が少数民族観光村に与える影響について」 『ツーリズム学会誌』 第4号 PP18~31
- 2) 陳晶, 2004, 「中国における少数民族地域振興政策の変遷について」 『ソシオロジクス』 日本大学大学院社会学研究会 第26号 PP1~20
- 3) 陳晶, 2004, 「中国における観光の新しい動向 - 貴州省少数民族の観光を中心に -」 『社会学論叢』 150号 PP23~42
- 4) 陳晶, 2005, 「中国少数民族地域における観光調査」 『社会学論叢』 153号 PP24~43
- 5) 山下晋司編, 1996, 『観光人類学』 新躍社
- 6) 山下晋司, 2008, 『観光人類学の挑戦 「新しい地球」の生き方』 講談社
- 7) 佐藤俊雄監訳, 1991, 『観光のクロス・インパクト』 大明堂
- 8) 橋本和也, 1999, 『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』 世界思想社
- 9) ジョン・アーリ, 加太宏邦訳1995, 『観光のまなざし』 法政大学出版社
- 10) 曾士才、西澤治彦、瀬川昌久編, 1995, 「暮らし分かるアジア読本 中国」 河出書房出版社
- 11) 曾士才, 1998年 「中国のエスニック・ツーリズム-少数民族の若者たちと民族文化」 『中国21』 Vol. 3 愛知大学現代中国学会 PP43-68
- 12) 付迎春、梁茂林編, 2003, 『走進西部貴州-旅遊指南』 貴州教育出版社
- 13) 楊龍編, 2002, 『貴州の生態観光』 貴州科技出版社
- 14) 現代中国ライブラリー <http://www.panda.hello-net.info/index.html>
- 15) 黔东南苗族侗族自治州政府編, 2002, 『黔东南苗族侗族自治州観光ガイド』 中国旅遊出版社
- 16) 黔东南苗族侗族自治州政府編, 1996, 「黔东南州国民経済と社会発展「九五」計画及び2010までの発展計画」
- 17) 黔东南苗族侗族自治州政府編, 1999, 『黔东南苗族侗族自治州における観光産業の展開ガイドライン』
- 18) 黔东南苗族侗族自治州政府編, 2003, 『黔东南州人民政府が観光産業の発展についての決定』 についての説明及び実施方法の通知
- 19) 黔东南苗族侗族自治州政府編, 1996, 『黔东南苗族侗族自治州観光発展企画』
- 20) 黔东南苗族侗族自治州政府編, 2001, 『黔东南苗族

侗族自治州觀光産業發展】

- 21) 中国旅遊統計年鑑 (2007)
- 22) 黔東南旅遊大發展「春意」萌動熱点資訊 KF118貴州視濱看房網 (2010)
- 23) <http://www.askci.com/freereports/2011/08/0811505225997.shtml>
- 24) <http://www.askci.com/>